

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11873

研究課題名（和文）個人旅行者の受け入れによる農家民泊経営モデルの構築

研究課題名（英文）The Management Model of Farmhouse Accommodation Mainly Accepted of the Individual Tourists

研究代表者

山田 耕生（Kosei, Yamada）

千葉商科大学・サービス創造学部・教授

研究者番号：70350296

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では個人旅行者による農家民泊の利用が普及している欧州の状況を踏まえ、日本でも今後同様の農家民泊利用が拡大するためのポイントを考察した。まず日本各地の個人旅行者の受け入れを主とした農家民泊の状況を明らかにした。次にイタリアのアグリツーリズム（農家民泊）についても同じく現状を明らかにした。それらの結果をもとに、日本とイタリアの農家民泊の比較考察を行った結果、個人旅行者の受け入れによる農家民泊の普及拡大に向けたポイントとして、宿泊施設としての質を高める客室への積極的な投資、泊食分離の徹底と食事（特に夕食）の商品化、インバウンド客を主とした連泊型の宿泊施設へのシフト、が提示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究でテーマにした農家民泊は1990年代に政府が提唱して以来、地方観光の宿泊施設として普及していないのが現状である。今後地方や農村部の観光活性化、インバウンド客の誘致などにおいては農家民泊はさらに注目されると予想される。その意味においてまだ研究の蓄積が少ない農家民泊の状況を本研究が明らかにした点は大きな意義がある。また農家民泊は農業生産以外の農家経営の安定化に果たす役割も大きいことから今後継続的な農家民泊研究が求められるといえる。

研究成果の概要（英文）：In this study, it was considered the key points for expanding farm stays by individual tourists in Japan in the future, based on the situation in Europe, where farm stays by individual tourists are widespread. First, it was clarified the current situation of farm stays in various parts of Japan that mainly cater to individual tourists. Next, it was clarified the current situation of agritourism (farm stays) in Italy. Based on these results, it was compared farm stays in Japan and Italy, and it was presented the following points for expanding farm stays by accepting individual tourists: 1) active investment in guest rooms to improve the quality of the accommodation, 2) thorough separation of accommodation and meals and commercialization of meal (especially dinner), and 3) shift to accommodations for multiple nights that mainly cater to inbound tourists.

研究分野：観光学

キーワード：農家民泊 アグリツーリズム 個人旅行者 農家民宿 ルーラルツーリズム グリーンツーリズム 農泊

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の農村地域では1994年に施行された農山漁村余暇法と、それに伴い翌95年から農山漁村体験民泊の登録が開始されたことをきっかけに、各地で農家民泊による地域活性化が本格的に取り組みられるようになった。以降、小中高校の教育旅行の受け入れで多くの宿泊客を集める地域も出てきた。しかし、個人旅行者に対応した経営を行っている農家民泊は少なく、個人旅行者が農村地域で宿泊する施設として定着しているとはいえない。

一方において、衰退が進む農村の活性化策や、農村地域の新たな魅力創出および活用といった側面では、農家民泊の需要は大きい。内閣観光戦略実行推進タスクフォースにおいても、「滞在型農山漁村の確立・推進」に関する具体策として農家民泊の推進が議題の中心に置かれている。さらに、個人旅行者の受け入れをメインとした農家民泊経営を行うことは、急増するインバウンド客の地方観光の受け皿になりうる。今後拡大する農家民泊の動向を整理・分析したうえで各地へ普及させるべく学術面からの貢献も求められている。

2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、個人旅行者の受け入れを主とした農家民泊が普及拡大するために、その経営および維持のためのモデルを構築することである。しかし農家民泊が注目され始めた90年代から現在まで個人旅行者による農家民泊利用が普及していない状況下では、まだモデル構築の段階ではないといえる。そこで、現時点での研究目標を以下の2点に設定した。

(1) 日本各地の個人旅行者の受け入れを行っている農家民泊の現状把握

まず1つ目は各地で散見される農家民泊経営の状況を明らかにすることである。数は少ないものの、各地には個人旅行者の受け入れを主とした農家民泊経営を行っている事例が存在する。そこで該当する農家民泊への訪問とインタビュー調査を実施し、現状を明らかにするとともに問題点を抽出した。

(2) イタリアのアグリツーリズム(農家民泊)の経営実態と日本との比較考察

イタリアは日本よりも約10年早く農家民泊に本格的に取り組み、現在では個人旅行者による地方観光の際の宿泊先として農家民泊が定着している。そのためイタリアの農家民泊を数軒調査し、経営の動向を明らかにすることで、日本の個人旅行者の受け入れを主とした農家民泊経営の普及に向けた鍵を提示できると考えた。

3. 研究の方法

研究の目的で述べた2点について、それぞれ以下の方法で行った。

(1) 日本各地の個人旅行者の受け入れを行っている農家民泊の現状把握

本研究の趣旨に合致する、各地の個人旅行者の受け入れ実績のある農家民泊のなかから数軒選定しインタビュー調査を実施した。具体的には宿泊客の動向については宿泊客の属性や居住地、宿泊目的、泊数、滞在中の行動などについて聞き取りを行った。農家民泊経営については開業年、宿泊業への従事体制、集客方法、農業経営の内容、体験メニューの有無と内容、宿泊客の受け入れ実績、開業に際しての投資などについて聞き取りを行った。また農家民泊調査に際して宿泊を体験しながら施設状況やオペレーションについて観察を行った。

(2) イタリアのアグリツーリズム(農家民泊)の経営実態と日本との比較考察

イタリアのアグリツーリズム(農家民泊)への現地調査を行い、インタビューによる農家民泊経営の実態を明らかにした。調査項目としては(1)の日本国内の農家民泊と同様である。イタリアと日本の農家民泊の調査結果を比較分析することで、現在の日本の農家民泊の課題を明らかにし、今後の普及拡大に向けての手がかりを考察した。

4. 研究成果

本研究の成果として以下の点を挙げる。

(1) 日本における個人旅行者の受け入れを主とした農家民泊の実態が明らかになった。これまで国内各地18軒の農家民泊を訪問し、インタビュー調査を行った。ここで明らかにされた農家民泊経営の特徴としては、多くの場合1日1組の受け入れによって宿泊客とのコミュニケーションを大切にしつつ、母屋から独立した離れを客室に提供し、キッチン機能も付帯させることで、宿泊客との間に生じるストレスを軽減しながら農家民泊を経営していることが分かった。宿泊客の動向としては、1軒を除きリピーターが年間宿泊客の半数以上を占めている。毎年同じ時期に宿泊する親戚や友人のような関係になった多くの宿泊客によって農家民泊経営が維持されている。これまでの研究ではほとんど見られなかった、個人旅行者の受け入れを主とした農家民泊の現状が明らかにされたことは大きな成果と言える。

(2) イタリアのアグリツーリズム(農家民泊)の実態を明らかにした。トスカーナ州を中心に10

軒のアグリツーリズムを訪問し、インタビューを実施した。アグリツーリズムの場合、宿泊者はアグリツーリズムを拠点に周辺のエリアを観光することが目的で宿泊する。そのため、日中、農家は宿泊者と関与せず、農業に専念することができる。この点は農業体験を重視する日本の農家民泊とは異なっている。客室タイプはB&Bタイプ、アパートメントタイプの両方がある。部屋数は複数あり、1日に数組の宿泊客を受入れている。多くのアグリツーリズムではレストラン営業を行っており、宿泊客以外にも料理を提供している。これらのことから、アグリツーリズムは農家にとって過度の労働力負担にならずに、宿泊業収入を得る機会となっていることが明らかになった。

(3)日本とイタリアの農家民泊の比較考察を通して、個人旅行者の受け入れによる農泊の特徴と普及拡大に向けたポイント3点を提示した。

宿泊施設としての質を高める客室への積極的な投資

イタリアのアグリツーリズムでは、すべての客室にトイレとシャワーを付帯させている。アグリツーリズム開業に際して数万ユーロをかけて施設改修を行っているのであり、改修費用はおおむね10年間で返済する計画を立てている。客室の質を高めることで食事、自然環境、建物、空間、もてなしなどを含めると周辺のホテルよりも水準の高い宿泊施設となり、安定した集客を維持している。

泊食分離の徹底と食事（特に夕食）の商品化

本研究に際し、筆者が調査で訪問したいずれの農家民泊施設においても食事は素晴らしく、他の飲食店では食べることが出来ない新鮮な食材や料理の数々に感動した。アグリツーリズムも同様であったが、夕食代は相対的に日本の農泊よりも高く、酒（ワイン）代なども別料金で明確に設定している。またアグリツーリズムではレストラン営業を行っているケースも多く、夕食を当該施設の宿泊客だけではなく一般客にも提供することで収益をあげている。

インバウンド客を主とした連泊型の宿泊施設へのシフト

日本の農家民泊への宿泊客はたいてい1泊であるが、アグリツーリズムへの宿泊客は2、3泊以上が多く夏季には1週間の滞在も珍しくない。しかしこれらの宿泊客の多くはイタリア国外からのインバウンド客である。それらの場合、アパートメントタイプに数泊し、レンタカーあるいは自家用車で周辺の観光を楽しむのが一般的なケースである。

以上の3点が日本の農家民泊の普及拡大に向けた鍵であるが、これらはそれぞれ関連している。客室の質を高めるべく改修投資し、1日数組を受け入れることで宿泊からの収益を安定させ、食事の料金をアグリツーリズム並みにし、一般客も受け入れるレストラン営業をしたり、自家農産物を使用した加工品を販売することで宿泊以外の収益を確保する。さらにインバウンド客が地方を周遊する時代が近いうちに来ると想定し、そのインバウンド客をターゲットにアパートメントタイプの客室やトイレとシャワーを付帯したB&Bタイプの客室を整備する。それにより地方旅行の際の宿泊施設として農家民泊が利用され、ひいては農家や農業の持続的な発展につながるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山田耕生	4. 巻 60-2
2. 論文標題 個人旅行者の受け入れを主とした農泊の特徴と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉商大論叢	6. 最初と最後の頁 143-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 YAMADA Kosei
2. 発表標題 Present situation and Possibilities of Spread Expansion of the Farmhouse Accommodation in Japan.
3. 学会等名 34th IGU (International Geographycal Union) Regional Conference. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田耕生
2. 発表標題 日本における個人旅行者の受け入れを主とした農家民宿の特徴と課題 - イタリア・アグリツーリズムとの比較
3. 学会等名 観光学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田耕生
2. 発表標題 個人旅行者の受け入れを主とした農家民宿の特徴と課題 - 日本とイタリアの事例
3. 学会等名 日本国際地域開発学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kosei Yamada
2. 発表標題 A Study on the Role of Farmhouse Accommodation in Japan Case of Otawara City, Tochigi Prefecture-
3. 学会等名 APTA Conference, 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田耕生・藤井大介
2. 発表標題 イタリアのアルベルゴ・ディフーゾの現状と日本への応用に関する考察
3. 学会等名 日本観光研究学会第33回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田耕生・藤井大介
2. 発表標題 イタリアのアルベルゴ・ディフーゾの現状と課題 - 日本の空き家、古民家の宿泊施設への活用に向けて
3. 学会等名 日本地理学会2019年春季学術大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------